

京都府埋蔵文化財情報

第126号

共同研究 京都府南丹地域における古墳時代の鉄器文化の特質について

小池寛・中川和哉・古川匠・竹原一彦----- 1

平成26年度発掘調査略報-----11

5. 木津川河床遺跡第26次

6. 大川遺跡第5次

7. 乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡

8. 出雲遺跡第19次・中古墳群第3次

9. 平安京跡・東本願寺前古墓群

10. 下水主遺跡第6次(I・J・K・L・M・N地区)

11. 松井横穴群第4次(1・2・4トレンチ)

長岡京跡調査だより・122-----22

普及啓発事業(平成26年12月～平成27年2月)-----24

第21回京都府埋蔵文化財研究会

「京都府内の信仰関係遺跡、遺物の検討」の開催成果とその意義----- 27

センターの動向(平成26年11月～平成27年2月)----- 28

2015年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府南丹地域における古墳時代の鉄器文化の 特質について

小池 寛・中川和哉・古川 匠・竹原一彦

1. はじめに

近年、南丹市八木町城谷口古墳群や南丹市園部町新堂池古墳群などの発掘調査によってそれぞれ特徴的な鉄器の出土が見られた。また、集落遺跡においても南丹市八木町諸畑遺跡や池上遺跡などの発掘調査で同地域の古墳時代の特性を捉えるうえで非常に重要な所見が得られている。本稿では、特に、古墳出土の鉄器を中心にその特質に焦点をあて、問題提起するものである。

本稿で取り上げる南丹市園部町新堂池古墳群は、平成15年度に発掘調査が実施され、2基の方墳と3基の円墳が確認され、陶器編年TK23型式併行期から同TK10型式併行期(現状での実年代は6世紀中頃とされる)に比定できる古墳群であることが確認された。諸般の事情により出土した土器群については、報告書に実測図を掲載することができたが、出土鉄器については、剣・鎌・鏃の一部についての実測図を掲載できたものの、すべての鉄器の実測図を掲載することができなかった。そこで、当調査研究センターでは、共同研究事業として実測作業と詳細観察を表記の4名により行うとともに、関連する資料調査を実施した。

本稿は、まず、新堂池古墳群の鉄器についての事実報告を行い、その後、周辺地域で近年、調査成果があった鉄器や土器についての集成とその出土意義について、資料調査の結果を視野に入れながら記述したい。

2. 南丹市園部町新堂池古墳群の地理的・歴史的背景

園部盆地は、京都府のほぼ中央に位置し、丹後・丹波・摂津・京都・近江にそれぞれ繋がる交通網の中核部に位置しており、まさに交通の要衝の地である。その地理的要因を背景に古墳出現期の前方後円墳である全長52mの黒田古墳が盆地の西端に築造される。この古墳からは破砕行方を伴う位至三公鏡が出土するとともに木棺や二重口縁壺などが出土している。初期ヤマト政権と当該地の繋がりを考える上で重要な古墳である。一方、古墳時代前期末から中期初頭に比定できる全長82mの園部垣内古墳からは、良好に残存する粘土槨から三角縁神獸鏡や方形板革綴短甲・車輪石・石釧などの副葬品が出土している。先に述べた交通網に隣接して築造されており、盆地一帯を治めた有力者の奥津城として考古学的にも重要な遺跡である。他にも全長77mの前方後方墳である中畷古墳なども当該地の古墳時代を考える上で重要である。

3. 新堂池古墳群の概略

さて、本稿の主題である新堂池古墳群は、これらの首長墳が築造される盆地中心部から1.5km北方に位置する狭小な平野部に突出する瘦せた丘陵部に所在している。

新堂池古墳群は、2基の方墳と3基の円墳から構成され、5号墳を除く4基の調査が実施された。方墳である3・6号墳は、陶邑編年TK23型式併行期から同TK47型式併行期に比定できる。3号墳は10×12mの長方形を呈し、2基の木棺直葬を埋葬施設とする。第1主体部からはヤリガンナ5点、曲刃鎌2点、鉄刀1点、鉄剣1点、袋状鉄斧1点、平根式鉄鎌5点、砥石1点が出土している。第2主体部からは、鉄刀3点、鑄造鉄斧2点、曲刃鎌1点、「U」字形鋤先2点、ヤリガンナや鉄斧などが出土している。北西周溝から陶邑編年MT15型式併行期の須恵器直口壺が出土しているが、埋葬施設からの出土ではない。

6号墳は、10×11mの長方形の墳丘を有し、1基の木棺直葬の埋葬施設が検出されている。墓壇上から須恵器有蓋高杯2セット、ハソウ1点が出土し、棺内から鉄剣1点、墓壇内から曲刃鎌1点、長頸鎌17点、その他不明鉄器が2点出土している。出土した須恵器から陶邑編年TK23型式併行期から同TK47型式併行期に比定できる。6号墳の出土遺物については報告書に実測図が掲載されており、本稿では割愛している。

一方、円墳である1号墳は、直径15mを測り、墳丘裾部に推定12基の柱穴が等間隔にめぐる。埋葬施設は、羨道から奥壁に至り直角に東方に屈曲する玄室をもつ「L」字形の横穴式石室である。玄室には礫床をもち、棺台と思しき人頭大の礫が床面に見られる。出土した須恵器には陶邑編年MT15型式併行期から同TK10型式併行期に比定できる土器が含まれる一方、陶邑編年TK217型式併行期の追葬段階の副葬品も出土している。

2号墳は、直径12mを測り、埋葬施設は、羨道から奥壁に至り直角に右方に屈曲する玄室をもつ「L」字形の横穴式石室である。玄室には礫床をもち、棺台と思しき人頭大の礫が床面に見られる。初葬面から出土した須恵器には陶邑編年TK10型式併行期に比定できる須恵器高杯がある。また、追葬面からは陶邑編年TK43型式併行期の土器が出土している。

鉄器は、両古墳の初葬面及び追葬面から鉄刀・刀子・鉄鎌などが出土している。

4. 新堂池古墳群出土鉄器について

ここでは、方墳であり木棺直葬を埋葬施設とする3・6号墳と、円墳であり横穴式石室を埋葬施設とする1・2号墳の出土鉄器について事実報告を行っておきたい。

(1) 1号墳出土鉄器(第1図) 1は残存長9.9cmを測る刀子であり、茎には鹿角が残存する。2は全長25cmを測る刀子であり、茎には木質が残存する。3は長三角有茎式の鉄鎌であり、残存長は6.6cmである。4は長三角有茎式の鉄鎌であり、残存長は7cmである。5は長三角長茎式の鉄鎌であり、全長11.4cmを測る。茎には矢柄の一部である木質が残存し、茎と矢柄を固定し装飾的な役割を有する桜皮が巻き付けられている。6は長さ3.3cm、幅3cmを測る鞆尻金具である。内面には一部ではあるが鞆の木質が残存している。7は全長30.8cmを測る小刀である。茎には木

質が一部に残存している。8は全長110.7cmを測る刀である。当該古墳群で出土した中で最長の刀である。

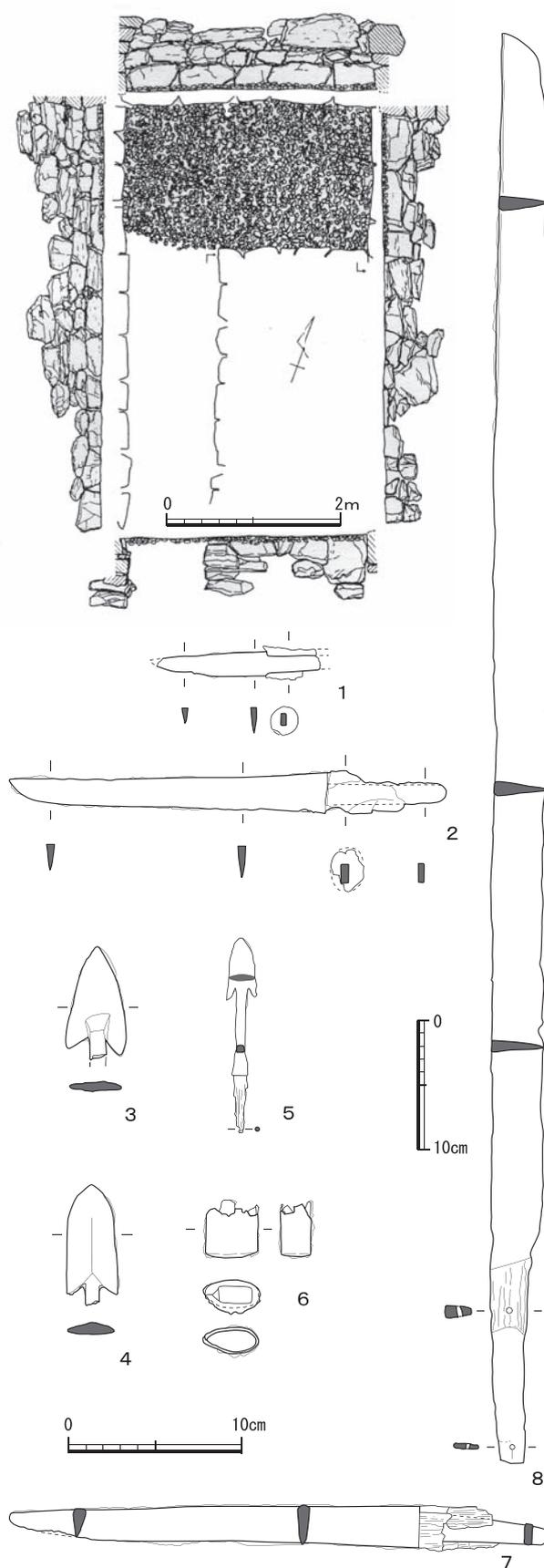
(2) 2号墳出土鉄器(第2図) 1は残存長7cmを測る短茎の腸袂を有する長三角形の鉄鏃である。2は全長10.5cmを測る短茎の長三角式の鉄鏃である。茎には矢柄の一部である木質が残存する。3は残存長10.7cm、4は残存長10.5cm、5は残存長7.7cm、6は残存長11.4cmを測る刀子である。茎には木質が残る個体がある。7は全長87.3cmを測る鉄刀である。茎は柄縁にある鐔装填か所で刀背の方向に湾曲しており、平安時代の^{きじもと}雉子股形茎に近似している。なお、茎には2か所に目釘穴を有している。

(3) 3号墳出土鉄器(第3・4図) 3号墳には2基の木棺直葬を主体とする埋葬施設が確認されている。元来、埋葬施設ごとに実測図を掲載し、型式の違いを視覚的に表すべきであるが、曲刃鎌と鉄斧の型式差がないことから、武器と農工具に分割して各々の特徴を記述することとした。埋葬施設ごとの出土鉄器は第3・4図のとおりである。

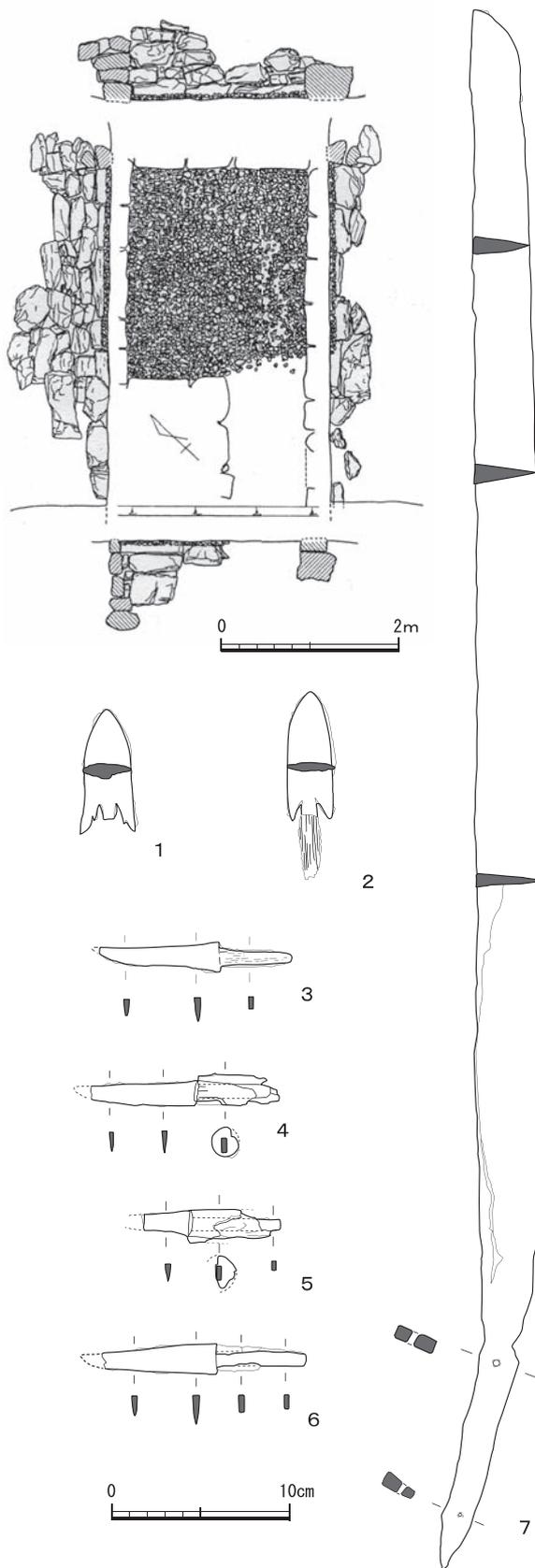
第1埋葬施設(武器)：刀子(第3図7)、鉄剣(第3図8)、鉄刀(第3図9)、(農工具)：ヤリガンナ(第4図1)、曲刃鎌(第4図5)、鉄斧(第4図8)

第2埋葬施設(武器)：鉄鏃(第3図1～6)、鉄刀(第3図10～12)、(農工具)：「U」字形鋤先(第4図2・3)、曲刃鎌(第4図4)、鉄斧(第4図6・7)

武器(第3図) 1～4は、短茎の腸袂三角式の鉄鏃であり、1は全長6cm、2は全長4.4cm、3は全長5.8cm、4は全長6.5cmを測る。おのおの根挟みによる矢柄の痕跡と



第1図 新堂池1号墳埋葬施設と出土鉄器実測図



みられる木質が残存しており、3の木質表面には桜皮が観察できる。5は縦長の三角形を呈する鉄鎌であり、全長6cmを測り、根挟みによる矢柄の痕跡とみられる木質が残存する。6は三角形を呈する鉄鎌であり、全長5.1cmである。8は残存長43.5cmを測る鉄剣である。茎には1か所に目釘穴が観察できる。9は全長91.1cm・刃長72.2cm、10は全長88.8cm・刃長69.4cm、11は全長85cm・刃長65.4cm、12は全長79.4cm・刃長63.6cmをおのおの測る鉄刀である。特に、9の柄縁には、明瞭に鏝の装着痕跡が残っている。

農工具(第4図) 1は先端の一部を欠いているが、想定される全長は32.5cmを測るヤリガンナである。全体的に湾曲する柄部と刃部からなる。2は全長9.8cm、最大幅13cmを測る「U」字形鋤先である。全体的に円形に近い形状を呈している。一方、3は全長14.8cm、最大幅13.5cmを測る「U」字形鋤先である。直線的な側面と尖り気味の刃部からなる。両者には形状と法量に顕著な相違点が見られる。4は全長21.5cm、5は全長17.2cmを測る曲刃鎌である。4には木質の一部が観察できる。6は有肩有袋式の鉄斧である。全長11.2cm、刃部幅7.4cmを測る。なお、肉眼観察では袋部の1cm程度に明瞭なメタルが観察できることから、当初から柄を装着せず、葬送儀礼用に製造された可能性を指摘することができる。その真偽についてはレントゲン写真などによる観察の必要がある。7は全長16.2cm、刃部幅5.5cm、8は全長15.9cm、刃部幅5cmをおのおの測る有袋式の鉄斧である。

第2図 新堂池2号墳埋葬施設と出土鉄器実測図

以上が本稿の主目的である新堂池古墳群出土鉄器の報告である。比較的豊富な鉄器

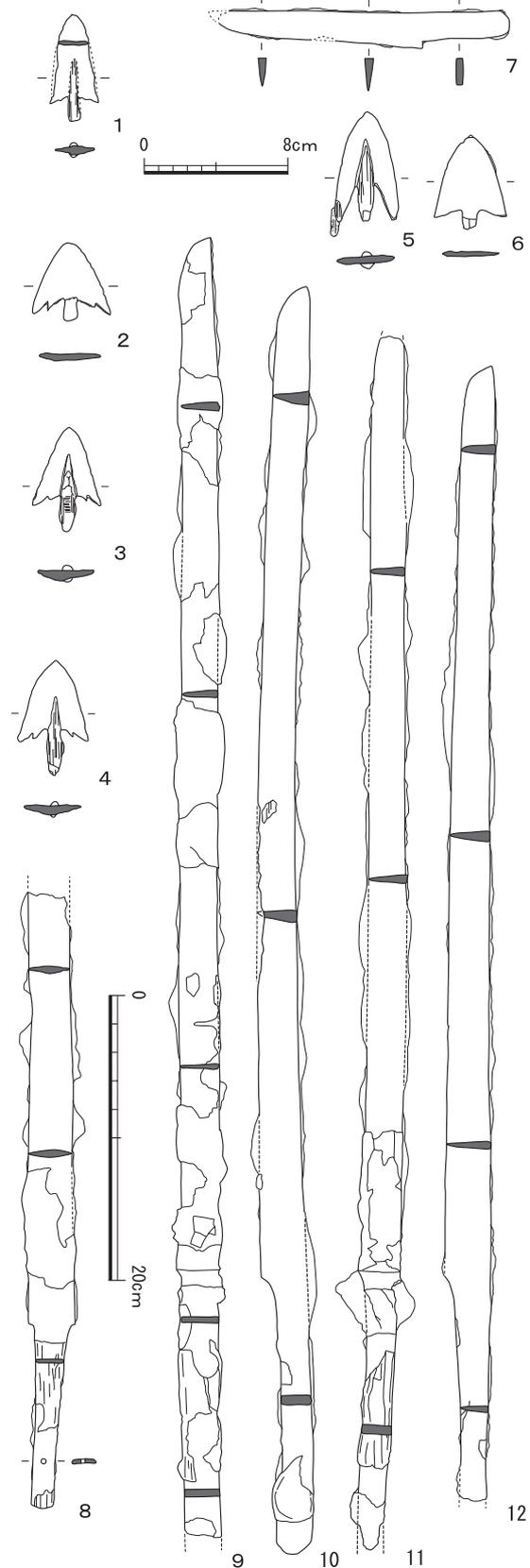
を副葬品にもつ南丹市域の古墳出土鉄器の新出資料として資料的価値は高いといえる。

5. 南丹地域の特徴ある鉄器文化について

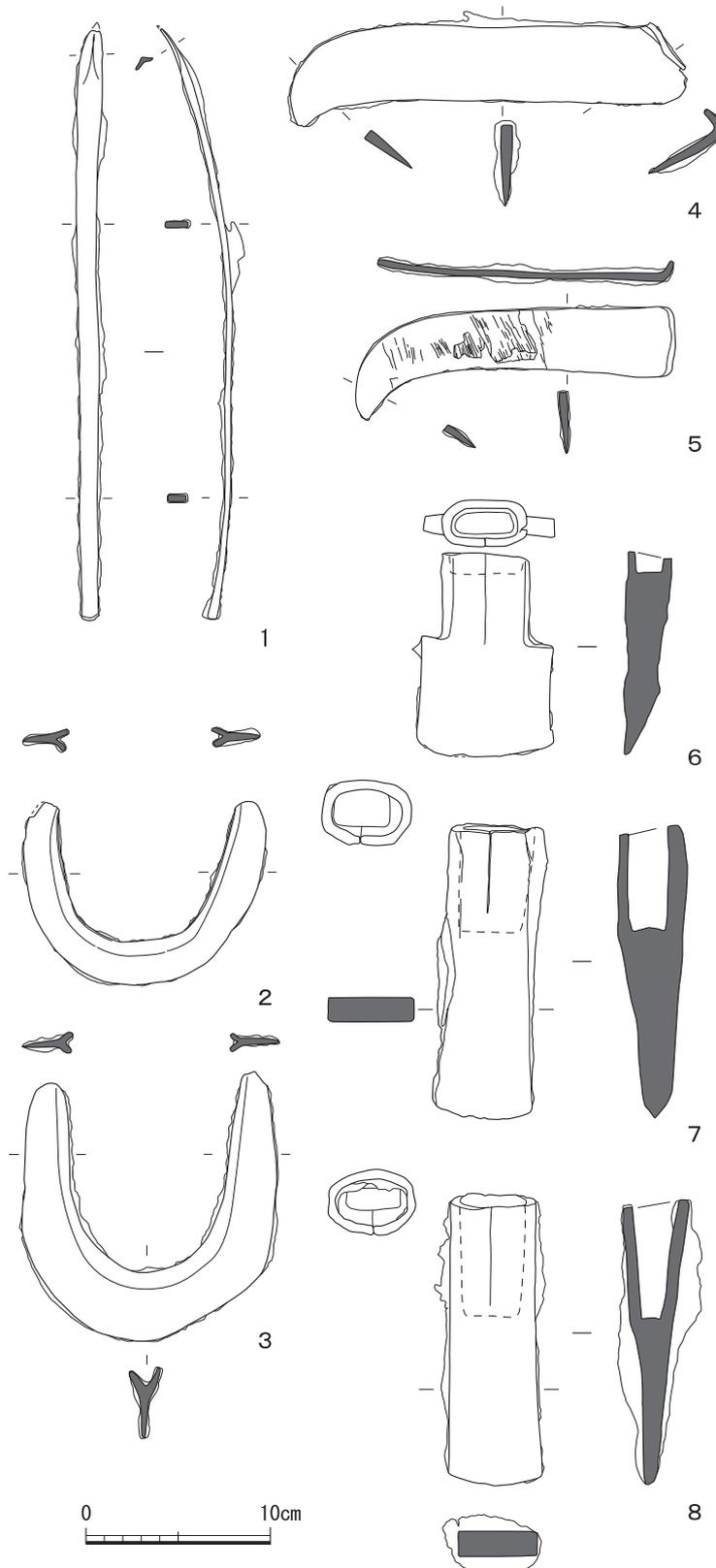
以上、述べてきたように新堂池古墳群から出土した鉄器は、質量ともに鉄器研究上、重要な位置を占めていることがわかる。ここでは、南丹地域を中心に分布する古墳や集落遺跡を概観し、その特質について考えておきたい。

古墳

(1) 城谷口古墳群^(注3)は、平成17年度に発掘調査が実施され、古墳中期の方墳3基と横穴式石室を有する後期の円墳を8基確認している。その中でも2号墳は、陶邑編年TK10型式併行期の横穴式石室を埋葬施設とする円墳である。石室の構造は、新堂池2号墳に共通する要素を有している。石室内から須恵器群とともに鉄剣・鉄刀・刀子・鉄斧・曲刃鎌・鉄鏃などの鉄器が出土している。出土鉄器の中で注目すべき資料が、蛇行剣と鉄鐸である。蛇行剣は、府内においては綾部市奥大石2号墳に次いで2例目であり、全長81.5cmを測る。畿内から出土する古墳時代中期の典型的な蛇行剣は、70cm前後の全長があり、基部から鈍にかけて左右に2か所で緩やかに蛇行させる共通の形式的特徴を有しているが、本例は全長のほぼ中央20cm間だけを3か所で蛇行させている。形式的には当該資料は、典型的な蛇行剣の範疇にはなく、6世紀の様相を有しているといえる。国内における蛇行剣の総出土点数は、60余点であり、その半数が宮崎県や鹿児島県に所在する地下式横穴墓



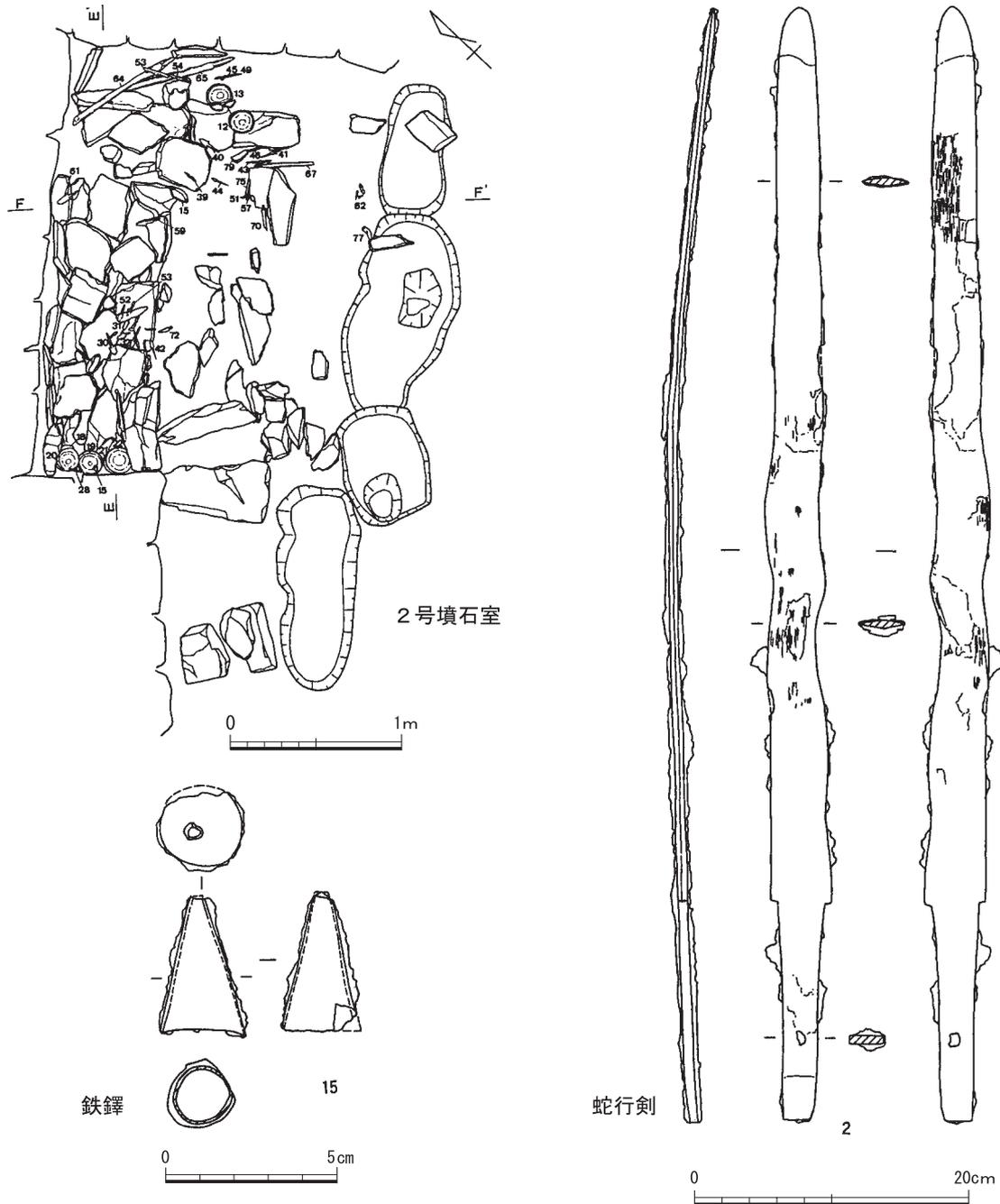
第3図 新堂池3号墳出土武器実測図



第4図 新堂池3号墳出土農工具実測図

からの出土であることから6世紀代である。一方、それより先行して畿内を中心とする5世紀代の古墳から半数が出土している。しかし、いわゆる首長墳からの出土は極めて少数であり、中核地域から離れた小規模古墳に偏在する傾向がある。奥大石2号墳や城谷口2号墳もその出土傾向に一致しているといえる。現在、蛇行剣は、出土点数の大半が国内からであり、朝鮮半島から出土した1点の蛇行剣は、日本国内からもたらされたと考えてよい状況である。城谷口2号墳の蛇行剣は、南丹地域のみで解釈すべき資料ではなく、九州から畿内一円との関係においてその出土の意義を考える必要がある。

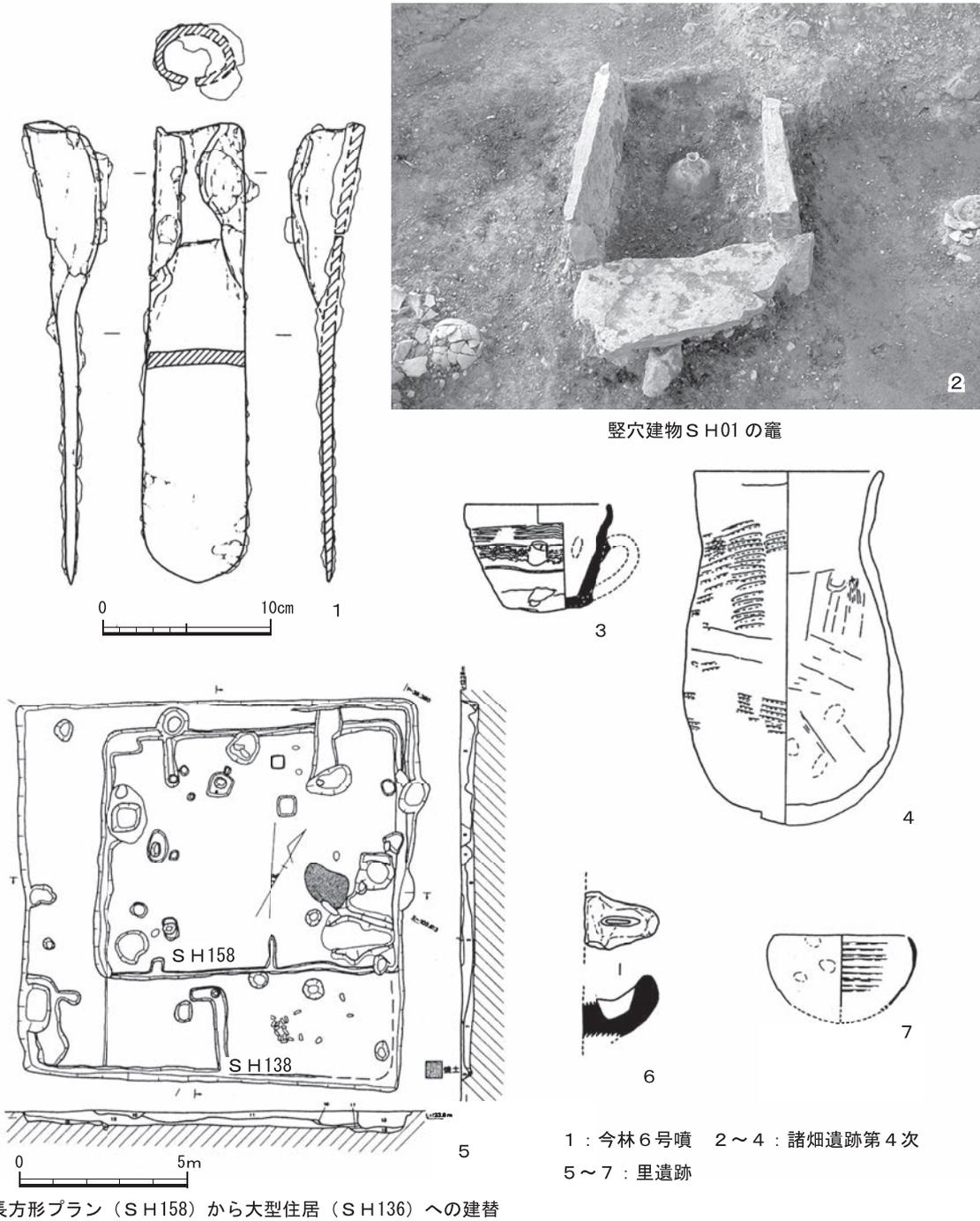
一方、鉄鐸は、一辺4cmの鉄板を円錐状に曲げた形状である。約1.5cmの鉄棒が内面に付着している。鉄鐸は、南丹市園部町町田東古墳からも出土しており、府内では2例目である。全国的には古墳中期後半から後期の古墳から出土し、特に、福岡県で多く出土している。また、朝鮮半島嶺南地方から多く出土している。鉄鐸自体は、蛇行剣同様、古墳が所在する地域だけでの解釈ではなく、東アジアを視野にその出土の意義を考える必要がある考古資料である。な



第5図 新堂池3号墳埋葬施設と出土鉄器実測図

お、城谷口2号墳は、特に九州北部地域との関係を示す特性があることから、当該地域の文化の影響を受けており、被葬者の性格を特定する作業が急務である。

(2)今林古墳群^(注4)は、園部盆地の北端丘陵部に築造された古墳群である。同一丘陵上には狭間墳墓群やカチ山北古墳群、平山古墳などが所在しており、その密集度は非常に高い。今林古墳群は、8基の方墳と円墳からなる古墳群である。特に、6号墳は長辺が22mを測る木棺直葬墳であるが、埴輪や舶載鏡、短甲など豊富な副葬品を有している。出土した鉄器の中で、踏鋤は、全長27cm、幅6cmを測り、折り返しによる袋部を有している。報告時点では国内では3例目とある。朝鮮半島にも出土事例が報告されていることから、蛇行剣や鉄鐸同様、東アジアの中でその意義につ



第6図 南丹地域の特色をあらわす資料

いて考えていかねばならない考古資料である。

(3) 拝田16号墳^(注5)は、亀岡市千代川町に所在する全長41mの前方後円墳である。埴輪は樹立されていない。南に開口する全長4.1m、玄室高3.4mの石棚を有する両袖の横穴式石室である。特に、玄室は穹隆状を呈していることから、和歌山県岩橋千塚古墳群に共通する構造がみられる。その石室構造から紀氏との深い関係を推定する見解がある。今まで述べてきた南丹地域とはやや離れるが、他地域との地域間交流を考えるうえで、当該古墳の存在は重要である。

集落

(1) 諸畑遺跡^(注6)は、南丹市八木町に所在する弥生時代中期から古墳時代中期にかけての集落遺跡である。第4次調査A-6トレンチにおいて長軸4.1m・短軸3.7mの方形の平面プランをもつ竪穴建物SH01を検出した。この竪穴建物の床面では、燃焼部の両側面に板石を立て、中央部に脚部を除去し、反転させた状態で土師器の高杯を据える構造の竈が確認されている。粘土を構築材とする竈は一般的であるが、板石により竈を構築するといった非常に稀な事例であり、高水準な技術によって構築された竈である。一方、この竪穴建物からは陶邑古窯址群産の須恵器椀が1点出土している。椀の外周中央に波状文が施されており、底部から直線的に開く体部の形状と器表面の色調から大庭寺遺跡TG232型式併行期に比定できる。また、中央に1孔、その周囲に7孔を円形に配置する円形蒸気孔をもつ土師器甑や、器高が21.6cmを測り、口径と胴部最大径がほぼ同じ法量を有する長胴の甕も出土している。この土器は頸部でほとんど屈曲しない形態であり、器表面が複数回の被熱により淡紫色の色調を帯びていることなどから、製塩土器とする説と韓式土器の一種ではないかとの見方がある。また、陶邑編年TK73型式併行期から同TK216型式併行期に比定できる高杯の蓋も出土している。

後述するが、亀岡盆地の北端に所在する里遺跡においてもやや後出する竈を有する竪穴建物が確認されているが、口丹波における導入期の竈は、諸畑遺跡が所在する地域にまず導入され、その後、集落間の交流などで拡散していく過程を見出すことができるとしている。

(2) 池上遺跡^(注7)は、平成13～15年度に発掘調査が実施された。先に述べた城谷口古墳群が所在する丘陵の東方に広がる平野部西端に所在する旧石器時代から平安時代の集落遺跡であり、特に、弥生時代の方形周溝墓も数多く確認されている。古墳時代の竪穴建物が数多く検出され、大阪府陶邑古窯址群産の須恵器や底部平底の韓式土器の甕や中央に1孔、その周囲に5孔を円形に配置する円形蒸気孔をもつ韓式土器の甑が出土するとともに、小札の出土が注目される。池上遺跡は、平野部に展開する大規模な拠点集落として機能していたと考えられる。

(3) 里遺跡^(注8)は、平成13～16年度にかけて調査が実施され、合計64基の竪穴建物を検出している。集落は陶邑編年TK208型式併行期に成立し、概ね陶邑編年TK209型式併行期まで存続している。その中でも長軸6m・短軸4.6mの長方形住居跡が一辺8mの大型住居跡に建て替えられていることが把握された。他の住居跡が正方形であるのに対して、長方形を呈する特異な形態の住居は、視覚的にも他の住居とは異なった意義があったと推定される。そして、その住居が一辺8mを測る大型住居に建て替えられることは、当該住居が、この集落の首長が住まう施設であったことを示している。なお、通有にみられる須恵器のほか韓式土器や和歌山県紀淡海峡に所在する西ノ庄遺跡からもたらされた製塩土器なども出土しており、先に述べた小地域での地域間交流とともに広域な交流をも行っていたことがわかった。南丹市から亀岡市北部にかけての地域的特色を考える上で重要な集落遺跡である。

6. まとめ

本稿は、未報告であった新堂池古墳群の出土鉄器の資料化に焦点をあてるとともに、南丹市域周辺域で確認された考古資料の一部を集成し、地域的特色の一端についてふれた。蛇行剣や鉄鐸の出土や韓式土器や紀淡海峡産の製塩土器の出土、そして、初期竈の検出など、当該地域が閉塞的な地域ではなく、北部九州から畿内周辺域を範囲とする地域間交流を頻繁に行っていたことを推測することができた。今後、事実報告を行った新堂池古墳群の鉄器群が、当該地域の古墳時代研究の基礎資料となることに期待したい。

(こいけ・ひろし = 当調査研究センター調査課課長補佐兼企画調整係長)

(なかがわ・かずや = 当調査研究センター調査課調査第1係長)

(ふるかわ・たくみ = 京都府教育庁指導部文化財保護課主任)

(たけはら・かずひこ = 当調査研究センター調査課調査第2係主査)

- 注1 竹原一彦・小池寛「新堂池古墳群第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第108冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注2 鉄器の実測は、表記の4名が分担し行い、編集は小池が担当した。
- 注3 中川和哉・高野陽子「城谷口古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第125冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
- 注4 引原茂治・福島孝行ほか「(5) 今林古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第97冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注5 亀岡市『新修亀岡市史資料編』2000
- 注6 福島孝行「諸畑遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第119冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 注7 中川和哉「池上遺跡第13・18次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第112冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004
- 注8 小池寛・松尾史子「里遺跡第3・5・6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第112冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

きづがわかしょう 5. 木津川河床遺跡第26次

所在地 八幡市川口地内

調査期間 平成26年5月7日～6月11日(前半) 11月4日～平成27年1月29日(後半)

調査面積 1,000㎡(前半300㎡、後半700㎡)

はじめに 今回の調査は、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所の依頼を受けて、緊急用河川敷道路整備事業に伴い実施したものである。木津川河床遺跡は、国道1号線の木津川大橋が架かる八幡市下奈良から、木津川・宇治川・桂川の三川が合流して淀川と名称が変わる八幡市橋本までの東西約5km、南北約2.5kmの広大な遺跡である。この遺跡では明治元年からの木津川流路付け替えにより、かつての居住域・耕作地などが川底や河川敷等となっている。周辺では弥生時代から江戸時代の遺構・遺物が検出されている。

調査概要 出水期を挟んで2時期にわけて調査を実施した。前半は幅4m、長さ75mのトレンチを設定した。砂層などが地表下1.5m前後堆積し、砂層の崩落と湧水が著しかったが、狭長なトレンチ内では噴砂と流路跡3条、溝1条、柱穴1基を検出した。堆積層からは平安～中世の土師器・須恵器・瓦器・瓦・瓦製土管等が出土した。後半は、トレンチ幅を広げ幅6m、長さ117mの範囲を調査した。トレンチ東部で溝や土坑・柱穴等を検出した。溝はおおむね東西方向に向き、これに直交する溝も存在した。溝から少量の瓦器等が出土した。柱穴の掘形は方形と円形のものがあり、少量の土器が出土した。調査範囲が狭く建物に復元できるものはなかった。なお、中央から西側では多数の遺物が認められた。中央部は中世以降の堆積物によって削られており遺構面は検出できなかった。しかし、島状に削り残された部分では8世紀の須恵器・土師器が多く出土しており、遺構と考えられる土器の集中して出土する地点が確認できたが、遺構の輪郭は削られており性格は不明である。

まとめ 標高10m付近で流路跡や溝群・土坑を検出した。後半の調査では土坑・柱穴を検出した。その中央部では、削平をまぬがれた部分から8世紀後半の遺物がまとまって出土した。木津川河床遺跡の東端で、古代～中世の遺構が残存しているのが確認できたことは貴重な成果であった。

(石尾政信)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

おおかわ 6.大川遺跡第5次

所在地 舞鶴市字大川

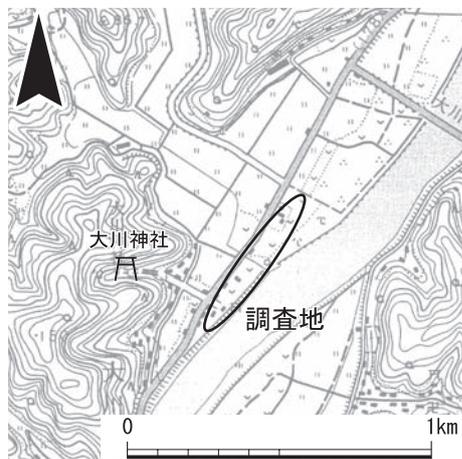
調査期間 平成26年4月10日～平成27年2月2日

調査面積 6,510㎡

はじめに この調査は、由良川下流部緊急水防災対策事業に関わる築堤工事に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。平成24年度より継続して調査を行っている。調査地は、河口から約8.5km遡った由良川左岸に位置する。

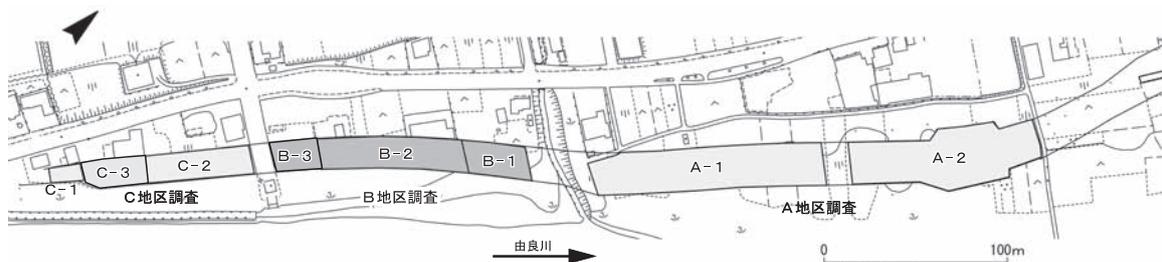
調査概要

弥生時代 弥生時代の竪穴建物7棟、方形周溝墓2基、溝を検出した。竪穴建物1は隅丸方形で、その他は円形である。竪穴建物2は、直径約9.2mを測る最大のもので、支柱穴は4本以上と推定される。床面中央には大型の土坑があり、その周囲2か所で炉跡とみられる焼土痕を検出した。弥生時代後期の甕や高杯の他、砥石が出土している。方形周溝墓1は2辺しか確認できなかったが、東西10m以上・南北約10mとみられる。方形周溝墓2は東西約9m・南北約6mを測り、いずれも中央に主体部を1基検出した。盛土は確認できなかった。主体部からは遺物は出土しなかったが、周溝からは甕や高杯がまとまって出土しており、弥生時代中期と考えられる。弥生時代の竪穴建物はB-2地区周辺に集中しており、その南部を一時期墓域として利用していたようである。



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 西舞鶴)

古墳時代 古墳時代前期から後期にかけての竪穴建物17棟、時期不明の竪穴建物5棟、溝及び土坑などを検出した。竪穴建物3は、東辺約5.6mの方形で、検出面から深さ0.3mと残りが良かった。検出範囲の壁面や床面には炭化した木材が残っており、焼失したものと考えられる。竪穴建物4は長辺約4m以上・短辺約3.6mの方形で、支柱穴は4本とみられる。中央で炉跡、南東辺中央付近に貯蔵穴とみられる土坑を検出した。その他、竪穴建物5・

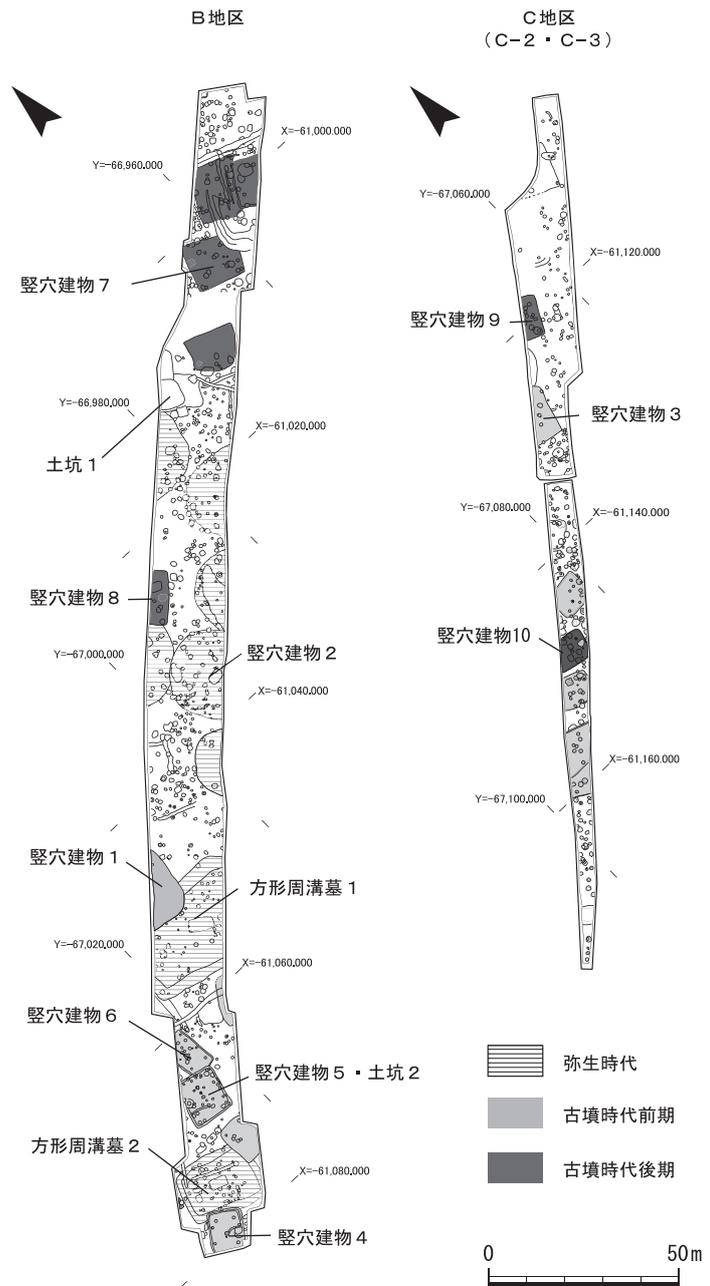


第2図 大川遺跡トレンチ配置図

6の中央に炉跡がある。これらの
 竪穴建物からは小型丸底壺・
 高杯・甕が出土しており古墳時
 代前期と考えられる。竪穴建物
 7は西辺、竪穴建物8～10は東
 辺中央にそれぞれ竈をもつ。い
 ずれも残存状況は悪く、煙道は
 残されていない。土坑1・2は
 多量の土器が出土した廃棄土坑
 である。竪穴建物5廃絶後に土
 器を廃棄した土坑2からは多く
 の高杯・甕の他、30点近くの白
 玉と1点のガラス小玉が出土し
 た。古墳時代前期の竪穴建物は、
 B-3地区からC-3地区に集
 中し、その範囲が居住域と推定
 できる。古墳時代後期の建物は、
 B・C地区全体に広がっており
 明確な居住域の想定は難しい。

まとめ 今回の調査で、弥生
 時代中期から古墳時代における
 集落の様子が明らかとなった。
 なお、A地区、C-1地区では
 同時期の遺構面は確認できず、
 下層の状態から当時湿地帯であ
 った可能性が高い。このことから
 C-2地区からB-1地区周

辺を中心として、居住域を移しながら集落を形成していたとみられる。細長い調査地であるため、竪穴建物全体を検出したものはないが、今回検出した遺構は大川遺跡の集落の一部であり、由良川側、山麓側それぞれに広がりをもつものと考えられる。



第3図 弥生時代～古墳時代遺構分布図

(綾部侑真)

いぬいだに
7. 乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡
いぬいだにおおくずれ

所在地 相楽郡精華町大字乾谷小字三本木ほか

調査期間 平成26年10月23日～平成27年3月6日

調査面積 2,050㎡

はじめに 乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡が所在する精華町は京都府の南西端部に位置し、西の京阪奈丘陵と東側に流れる木津川に挟まれた南北に延びる地帯である。乾谷遺跡は、南端部に流れる山田川の北に位置する遺物散布地で、これまでに弥生時代の石包丁が発見されている。北側の丘陵には中世の山城である乾谷城山城跡が所在する。また、乾谷大崩遺跡は乾谷遺跡の西に約400mに所在する遺物散布地である。乾谷大崩遺跡の南側、山田川の対岸の丘陵には奈良時代の瓦窯である乾谷窯跡群が所在する。今回、当遺跡地内において国道163号精華拡幅事業が計画されたことに伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて、事前に調査を実施した。

調査概要 調査は道路路線内に乾谷遺跡では4か所、乾谷大崩遺跡では3か所の調査区を設定し実施した。乾谷遺跡では、水田・畑地であった現地表面下では山田川の洪水による砂の堆積を約0.7m確認し、洪水砂の堆積の下では水田面や畦畔を確認した。水田面からは江戸時代初め(17世紀中頃)の土器や下駄が出土した。その下層には洪水砂が約0.5m堆積しており、鎌倉時代後半(14世紀)～室町時代末(16世紀後半)の土器が出土する水田面を確認した。乾谷大崩遺跡では、東側に設定した調査区では現代の耕作土・床土の直下で江戸時代の耕作溝を検出した。その下層で須恵器などの土器が出土するものの遺構は検出できなかった。西側の調査区では江戸時代の水田面を検出した。その下層には15～16世紀の遺物を含む層があり、さらにその下層で2条の南北溝を検出した。検出面では中世の土器に混じり、17世紀前半の土器が出土している。この溝の間には水田の畦畔があり、水田の用水路として機能していたものと考えられる。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 奈良)

まとめ 今回の調査は、乾谷遺跡と乾谷大崩遺跡の2遺跡で実施した。いずれも今回の調査が初めての発掘調査となった。乾谷遺跡では山田川の洪水による砂の堆積層と水田面を数面確認できた。中・近世からこの地は耕作地であり、山田川の洪水に見舞われるたびに新たに水田をつくっていたことが確認できた。乾谷大崩遺跡では江戸時代の水田面と畦畔や耕作面を確認し、下層では畦畔と用水路と考えられる2条の南北溝を検出した。

(村田和弘)

いずも 8. 出雲遺跡第19次・なか 中古墳群第3次

所在地 亀岡市千歳町千歳地内

調査期間 平成26年8月23日～平成27年2月26日

調査面積 1,700㎡

はじめに 出雲遺跡は、亀岡盆地東部に所在する複合集落遺跡である。今回の調査は、遺跡中央から中古墳群が立地する南部を対象とした。一帯には、坊主塚古墳(方墳、一辺34m)や時塚1号墳(方墳、一辺24m)などの中期古墳が分布し、北に約1kmの山麓には延喜式内社で丹波一宮の出雲神社が所在する。出雲遺跡の過去の発掘調査では、平安時代～鎌倉時代の建物や大溝などが検出され、中古墳群では、葺石・埴輪をもつ1号墳のほか、周囲の古墳の一部が調査されている。今回の調査は、京都府農林水産部の依頼を受けて、主要地方道亀岡園部線(北々伸)防災・安全交付金事業に伴い実施した。

調査概要 調査は、出雲遺跡の中央部の周辺に、11か所の小規模な調査区を設けて実施し、遺構の有無を確認した。このうち9区では、平安時代後期～末期の幅3～4mの溝を確認し、拡張して調査した。また、南部の中古墳群周辺に調査区(2区)を設け、中古墳群を構成する中期の3基の方墳を確認したほか、平安時代末期～鎌倉時代前期の溝や柱列・土坑等を検出した。中古墳群の調査では、一辺約28mの方墳である1号墳と3基の古墳の一部を調査し、1号墳の墳丘東辺と東側の周溝(溝S D201)を確認した。墳丘は、東辺の基底を約25m以上にわたって検出し、人頭大の石材を用いた葺石を4～5段分検出した。周溝(溝S D201)は、幅約6m以上、検出面からの深さは約1.4mを測るが、中世に古墳の周溝を再掘削していることが判明した。中世の遺構としては、素掘り溝や柱列・井戸等を確認した。

まとめ 今回の調査では、過去に調査された3号墳が2基の小規模墳に分かれることが明らかとなり、中古墳群は7基以上からなる古墳群であることが判明した。1号墳の周溝からは、布留式甕や須恵器器台片、埴輪等が出土した。出土遺物には時間幅があるため確定できないが、古墳時代中期中葉以降に築造されたものと推定される。また、1号墳の周溝は、平安時代末期～鎌倉時代前期に再掘削され、2区では柱列や井戸を検出したことから、周辺は中世には居住域として利用されたことが明らかとなった。

(高野陽子)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 亀岡)

へいあんきょうあと ひがしほんがんにまへこぼぐん
9. 平安京跡・東本願寺前古墓群

所在地 京都市下京区烏丸通り七条下る東塩小路町

調査期間 平成26年5月21日～平成27年1月16日

調査面積 1,900㎡

はじめに 今回の調査は運転免許更新センター及び地域防犯ステーション等整備事業に伴い、京都府総務部府有資産活用課・ダイワロイアル株式会社の依頼を受けて発掘調査を実施した。

調査地は京都府七条警察署跡地であり、平安京左京八条三坊九町にあたる。周辺は平安時代後期から七条町、八条院町が形成され、商工業の中心地として栄え、室町時代には東本願寺前古墓群が形成された。

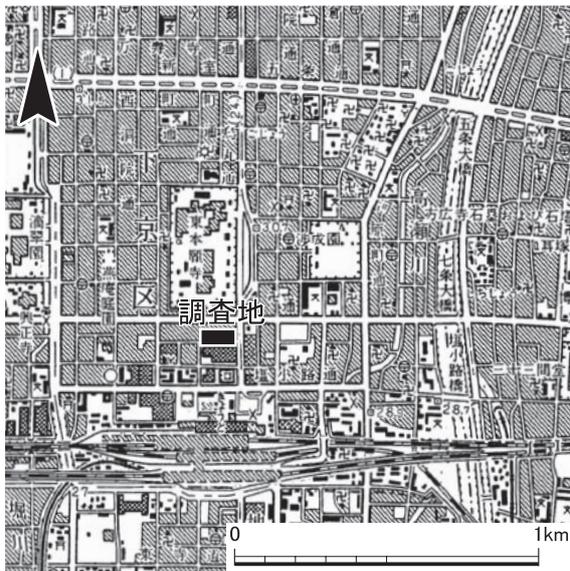
調査概要

①鎌倉時代後半～室町時代

柱穴 調査区全体で多数の柱穴を確認した。直径0.25～0.65m、深さ0.1～0.5mを測る。他の遺構による削平を受けており、建物に復元することはできなかった。

溝 調査区中央部で2条の溝を検出した。溝S D238は東西に延びる溝の西端が北側に屈曲する逆「L」字形の溝で、検出長17.5m・幅0.9m・深さ0.4mを測る。溝S D275は南北方向に掘削された溝で、検出長8.5m・幅0.4m・深さ0.1mを測る。これらの溝は東西・南北方向に掘られていることから、宅地を区画する溝と考えられる。

土坑 調査区全体で大小180基以上の土坑を検出した。これらの土坑のうち、70基以上の土坑から多量の土師器が出土した。土師器を集積した土坑は調査地の全域に分布し、その多くは一辺1～1.5m・深さ0.05～0.4mを測り、平面形は方形～隅丸方形や円形～楕円形を呈する。内部



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都東南部)

から出土した多量の土師器はいずれも細かな破片となっており、埋土の上から下まで隙間なく埋まっていたが、底面付近では完形の土師器数枚～数十枚が口縁部を上・下に向けて置かれた状態で出土した。その他、常滑産大甕・輸入陶磁器などの破片も少量出土した。

直径0.95m・深さ0.36mを測る平面形が円形の土坑S K124では、底面近くに置かれた完形の土師器皿の下に灰が敷かれていた。

これらの土坑からは土師器皿のほか、土師器鍋・鉢、瓦質土器鍋・壺、輸入陶磁器などの破片も少量出土した。土器以外には、鉄釘・銭貨・

骨片・炭・灰などが出土しており、土坑 S K 626からは鞘入りの小刀が出土している。

埋甕遺構 調査区全体で5基の埋甕遺構を検出した。埋甕 S K 230は調査区南西部で検出し、常滑産大甕が底部を打ち欠き、横位に埋められていた。口縁部は瓦で塞ぎ、土師器皿を甕の外に置いており、土師器皿数枚が流入土とともに内部に落ち込んでいた。



写真 調査地全景(西から)

井戸 調査地西部の北辺で2基の井戸を検出した。井戸 S E 20は平面円形を呈する素掘りの井戸で曲げ物が遺存していた。井戸 S E 847は平面方形を呈する方形縦板横棧留の井戸である。

その他に、遺構は検出されなかったが、取鍋・鍛冶滓・銅滴・金箔・砥石未成品などが出土した。周辺に鑄造や鍛冶、金細工などに携わった工房が存在したと推測される。

②平安時代～鎌倉時代中葉 調査区東南部で黄褐色粘質土の整地層を確認した。整地土に含まれる土器から、鎌倉時代前半～中葉にかけて整地されたと推定される。整地層下層より井戸7基と土坑2基、溝2条を検出した。井戸は平面方形、円形の2種類であり、素掘りのものと、縦板横棧組の井戸枠をもつものがある。全ての井戸の底には曲げ物を据えていた。

平安時代の遺物は須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土しているが、遺構は調査区北西部で土坑1基を検出したのみである。

まとめ 以上のように、今回の調査では鎌倉時代後半から室町時代の遺構を多数検出した。鑄造や鍛冶、金細工などに関連する遺物が出土したことから、七条・八条の周辺に住まう職人たちの生活に伴うものと考えられる。

調査地では鎌倉時代前半から中葉に人為的に井戸を埋め、整地を行った後、土地を溝で小区画に分割し、小規模な建物を造営していたことが判明した。

敷地内の空閑地では大量の土師器を用いた儀礼を行ったと考えられる。比較的小さな土坑に土師器が大量に充填されている点や、底面近くに完形のものが置かれた状態で出土している点は、ゴミなどを捨てた廃棄土坑とは考えにくい状況であり、何らかの儀礼に伴って造営されたと推測される。また、一部の土坑からは鉄釘・銭貨・骨片が出土しているので、これらの土坑の一部は宅地内に造られた墓の可能性もある。以上のように、当該地域の土地利用の変遷と生活の様子を知る良好な資料が得られた。

(福山博章)

しもみずし 10. 下水主遺跡第6次 (I・J・K・L・M・N地区)

所在地 城陽市寺田金尾・今橋

調査期間 平成26年4月21日～平成27年1月29日

調査面積 12,870㎡(I地区：900㎡、J地区：2,590㎡、K地区：3,120㎡、L地区：2,620㎡、M地区：1,220㎡、N地区：2,420㎡)

はじめに この調査は新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。下水主遺跡は城陽市の南西部に位置し、木津川右岸の微高地とその後背湿地に立地する。遺跡の範囲は南北980m、東西540mに広がり、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。今回は平成26年度調査のうち、I～N地区の調査について報告する。

調査概要 今回の調査地は遺跡の北西部に当たり、一般国道24号の西側に位置する。ここに南からI・J・K・L・M・Nの各調査区を設定した。各調査区では、中世の島畑のほか、古代・古墳時代・弥生時代・縄文時代の遺構・遺物を検出した。

① I地区 東西方向の島畑を5基検出した(島畑54～58)。島畑は検出長3.5～4.5m、幅2～13mを測る。島畑56・57では、島畑の長軸方向に延びる耕作溝を5条検出した。下層遺構は確認できなかったが、サブトレンチを設定して下層の土層観察を行ったところ、島畑の下層でピート層を検出した。この層の時期は不明である。

② J地区 南北方向の島畑を3基検出した(島畑59～61)。調査区中央の島畑60は検出長96m、幅13mを測る。また、その上面で島畑の長軸方向に並行する区画溝と推定される溝を検出した。下層遺構として島畑に対して斜行する溝を1条検出した。この溝は、他の下層検出の溝よりも規



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

模が大きく、一部拡張して調査を実施した。検出長38m、幅6.5～8m、深さ1.4mを測る。溝から建築部材や土師器などが出土した。溝の時期は古墳時代前期である。

③ K地区 東西方向の島畑を7基検出した(島畑62～68)。島畑は検出長8.5～22m、検出幅4～24mを測る。島畑62・64～68の上面では島畑に伴う耕作溝を多数検出した。下層遺構としては鍛冶炉の可能性のある焼土と、島畑に対して斜行する溝を1条検出した。下層溝の規模は検出長21m、幅約1.4m、深さ0.5～0.6mを測る。溝の時期は不明であるが、周辺での検出例から、

弥生時代後期ごろの溝と推定される。

④L地区 南北方向の島畑を4基検出した(島畑69～72)。島畑は検出長27～55m、検出幅5～8.5mを測る。島畑70・71の上面で島畑の長軸方向に延びる耕作溝を検出した。下層遺構として島畑に対して斜行する溝2条などを検出した。溝からは弥生土器が出土した。さらに下層では、木津川の氾濫によって形成された自然地形とそこに堆積した土層を確認した。地形は谷状を呈しており、平面形は弧状を呈する。堆積層からは流木や木の実などの有機物のほか、縄文時代晩期の土器が多数出土した。また、谷状地形の最も底では縄文土器のほか、櫛状木製品の未製品が出土した。

⑤M地区 南北方向の島畑を4基検出した(島畑79～82)。島畑は検出長10～21m、検出幅4～10mを測る。島畑80の上面で島畑の長軸方向に延びる耕作溝を多数検出した。また、島畑間の溝の底で島畑と同一方向へ延びる幅の狭い溝を検出した。下層遺構としては、ピットと溝がある。まず、島畑の溝でピットを1基検出した。ピットから古代の土師器が良好な状態で出土した。また、島畑に対して斜行する溝1条を検出した。溝からは弥生土器が出土した。

⑥N地区 南北方向の島畑を3基(島畑74～76)、東西方向の島畑を1基(島畑73)検出した。島畑は検出長18～62m、幅3～12mを測る。各島畑の上面で島畑に伴う耕作溝を多数検出した。下層遺構として溝・柱穴・土坑を検出した。また調査区の東側で古代の柱穴6基を検出した。建物として復元することはできなかったが、調査区外の東側へ展開する可能性がある。また、弥生時代後期の溝2条と中期の土坑5基を検出した。

まとめ

①中世以降は、これまでの調査成果と同様に島畑が形成されていることを確認した。調査では今回検出した27基の島畑を含む80基を超える島畑を確認している。これら島畑の配置状況は現代の水田の区画に踏襲されていることが明らかになった。

②古代の遺構は検出数が少なかったが、N・M地区で柱穴等の遺構を検出したことから、遺跡北部において、この時期の遺構が広がる可能性がある。

③古墳時代の遺構としては、J地区で溝を検出した。この溝からは土師器のほか建築部材などが出土した。調査区内において建物は確認していないが、近隣地に古墳時代の建物が存在した可能性がある。

④弥生時代の遺構は、各調査区で検出しており、その多くは溝である。これまでに検出した遺構の多くは後期のものであるが、N地区では中期の土坑などを確認した。したがって、遺跡北部では弥生時代中期には遺構群が形成されていたことを示している。

⑤L地区で検出した自然地形は木津川の氾濫に伴うものである。縄文土器が氾濫による堆積層から多数出土していることから、近隣に縄文時代晩期の集落が存在した可能性を示している。

(渡邊拓也)

まついおうけつぐん
11.松井横穴群第4次(1・2・4トレンチ)

所在地 京田辺市松井向山・上西浦地内

調査期間 平成26年4月15日～平成27年3月6日

調査面積 3,190㎡

はじめに 松井横穴群では新名神高速道路整備事業に伴う発掘調査を実施した。調査は平成23年度から引き続き行った。調査地は男山丘陵へ続くほぼ南北方向に延びる支脈の一つに所在する。支脈は2つの尾根からなり、その斜面両側に横穴がある。トレンチは西から第12・1・2・4トレンチと名付けた。今回の第4次調査では第1・2・4トレンチで調査を実施した。周辺には八幡市女谷・荒坂横穴群、美濃山横穴群、狐谷横穴群、京田辺市堀切谷横穴群といった横穴墓が多くみられる。なお、これまでの調査経過は本誌第121・122・124号で略報している。

調査概要 本年度の調査対象の横穴墓は1トレンチで21基、2トレンチで15基、4トレンチで4基の計39基を数える。



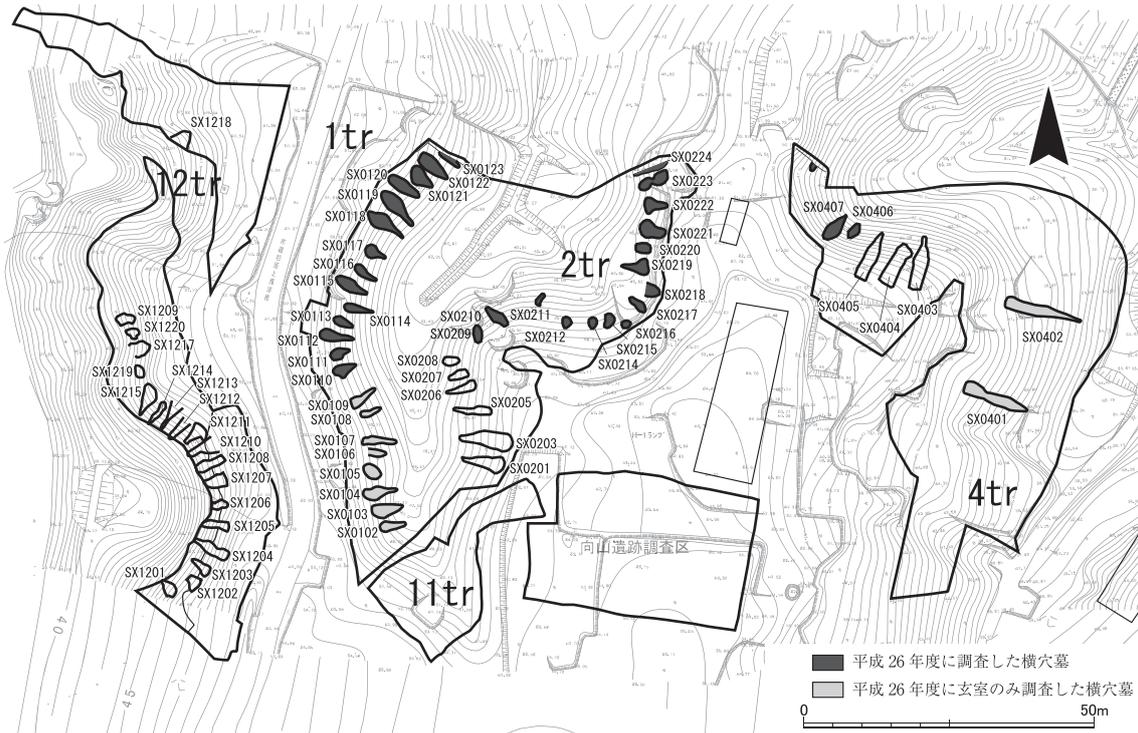
第1図 調査地位置図
 (国土地理院 1/25,000 淀)

1トレンチ 谷の西斜面に設定した調査区である。22基のうち21基(S X0102～0122)を調査した。うち南側の8基は昨年度に墓道の調査を終了し、玄室のみの調査である。横穴墓の平面形は笏状ないし杓文字状を呈するものが大部分を占め、玄門部に袖部を造り出さないものが多い。特徴的な遺物としてS X0111玄室部から陶棺が出土している(写真)。陶棺は長軸が横穴墓の主軸と平行になるようおかれていた。全長約85cm、幅約40cm程度の小型品である。平面形はおおむね長方形で、短辺の片側が外側に向かって円弧状に膨らむ。上面のほぼ中央を方形に切り取り、蓋としている。上半部には突帯をめぐらしている。



写真 S X0111出土の陶棺(上が南)

2トレンチ 谷の東斜面に設定した調査区である。21基のうち15基(S X0209～0223)を調査した。墓道先端の残存状態が良くないものも多く、横穴築造以後に地形の改変があったと推測できる。横穴墓の平面形は笏状となるものが多い。玄門部の両側に袖部を造り出すものも多くみられる。また、玄門部床面が玄室部に向かい緩やかに登るスロー



第 2 図 トレンチ配置・横穴墓位置図

ブ状や段となる例を確認している。玄室からは 2～3 体程度の人骨の出土を複数の横穴墓で確認している。S X 0221 では残存状態は良くないものの、横穴墓の主軸と平行に 3 体の人骨がおかれていた。3 体とも頭蓋骨が入口側を向く。一方で、S X 0212 では少なくとも 2 体分の人骨を片側に集めたような状態で確認している。埋葬の際には、S X 0218 などから鉄釘が出土したことから組合せ木棺が用いられたと想定できる。ただし、鉄釘が出土する横穴墓はごく限られる。鉄釘は出土しないものの、棺台と思われる石材が確認できる例もある。このことから、木の板に直接遺体を安置する、あるいは、鉄釘を使用しない木棺が用いられたとも考えられる。

4 トレンチ 1・2 トレンチのある谷から尾根をはさんだ東斜面に設定した調査区である。8 基のうち 4 基(S X 0401・0402・0406・0407)を調査した。S X 0401・0402 は昨年度に墓道の調査を終了し、玄室のみを調査した。S X 0407 では、玄室床面より上で木炭が広がり、その上面に灰釉陶器が出土しており後世に再利用されている。

まとめ 出土遺物から今回調査した横穴墓の時期は、おおむね T K 43～217 型式期(6 世紀の第 4 四半期～7 世紀の中頃)である。なかでも S X 0111 から出土した陶棺は、他に奈良市宝来横穴群出土例があるものの、希少な例である。被葬者集団を考える貴重な資料となろう。

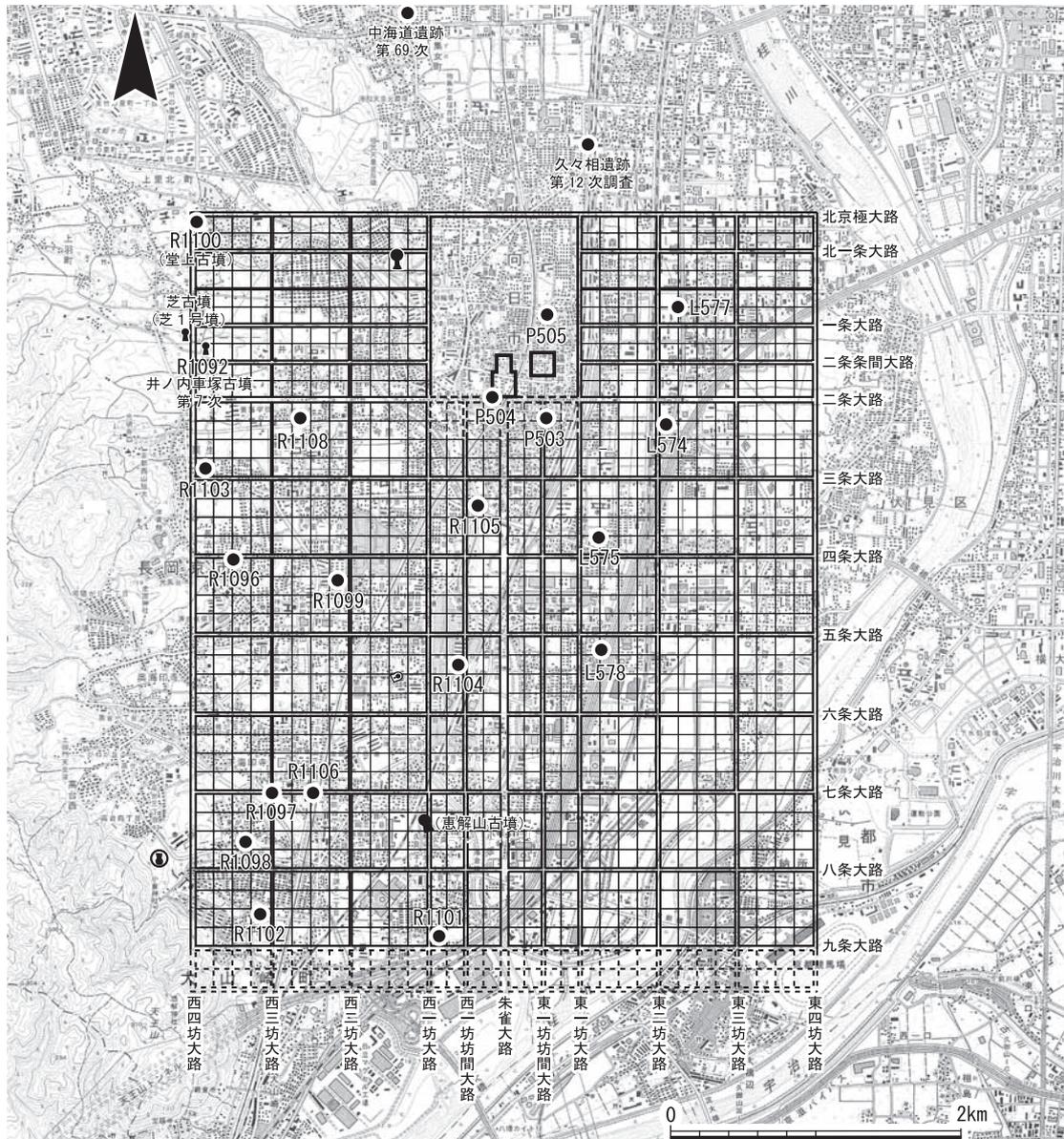
第 1 次からの調査で 70 基の横穴墓を確認した。今回の調査区外にも多くの横穴墓が埋没していると考えられる。周辺における横穴墓の調査成果を参考にすると数百基の横穴墓が存在すると想定できる。女谷・荒塚横穴群や美濃山横穴群といった周辺の横穴墓を含めると、近畿地方でも有数の横穴墓集中地域となる。今後、南山城地域における古墳時代後期から終末期の墓制を考える上で重要な調査成果となる。(鈴木康高)

長岡京跡調査だより・122

長岡京跡における発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成26年11月から平成27年2月の例会では、宮域2件、左京域4件、右京域13件、京域外2件の合計21件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

宮域 第505次調査(向日市森本町)では、竪穴建物の周壁溝や柱穴が検出された。

左京域 第574次調査(向日市鶏冠井町)では、三条条間北小路の南北両側溝が検出された。北側溝が深く掘り込まれており、京内基幹排水路としても機能していた。町内では長岡京期の土器



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)
調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。



第2図 大原野周辺の古墳分布図 (1/25,000)

類が投棄された窪地状地形が存在した。中福知遺跡と重複する第575次調査(向日市上植野)では、旧小畑川の堆積土上面で平安時代から中世の柱穴や曲げ物を井筒とする井戸などが検出された。第577次調査(向日市森本町)では東三坊坊間西小路と一条条間小路の交差点部分の調査で条坊側溝と10尺の柱間をもつ柵が検出された。

右京域 乙訓地域で有数の弥生環濠集落として知られる長法寺遺跡内で実施された第1096次調査(長岡京市長法寺)では、弥生時代後期の環濠と甕棺墓、古墳時代中期の埴輪棺が検出された。環濠は調査地内で途切れ、内外を結ぶ通路の可能性が指摘された。長岡京の西端に近い第1103次調査(長岡京市粟生)では、飛鳥時代と推定される掘立柱建物、平安時代の溝などが検出された。第1104次調査(長岡京市神足)では、近世勝竜寺城に関連する礎盤を有する柱構造の柵や溝と、その下層から長岡京期から中世にかけての多数の柱穴、古墳時代の竪穴建物、古墳の周溝(開田古墳群)を検出した。第1108次調査(長岡京市今里)では、古墳時代の竈を付設する竪穴建物が検出された。

京域外 14基からなる芝古墳群の中で唯一の前方後円墳であり、葺石と埴輪列の外部施設を備えた芝1号墳(京都市西京区大原野)の調査が進み、前方部主体部から墳丘外に延びる石囲い構造の排水溝が確認された。周濠内から出土する埴輪から、6世紀初頭に築造された首長墓であることが解明された。また、後世の寺院造営にともなう盛土内で近世墓や牛骨を納めた土坑が検出された。北辺の墳丘葺石と埴輪列が確認されていた堂ノ上古墳(京都市西京区大原野)では、その西方で逆「L」字状に南方に折れる幅3.5mの周濠と埴輪列・葺石の断片を確認し、全貌は不明ながら、一辺23m以上を測る中規模な方墳であることが判明した。出土埴輪の特徴から古墳時代中期前半を遡る築造時期が考えられる。古墳時代初頭の大型建物跡のすぐ東隣に位置する中海道遺跡第69次調査(向日市物集女町)では、建て替えを伴う平安時代中期の掘立柱建物と古墳時代初頭(庄内式古段階)の井戸や溝・窪地状遺構が確認された。特殊な穿孔をもつ紡錘車形の土製品も出土した。久々相遺跡第12次調査(向日市寺戸町)では、奈良時代の柱穴・東西溝、飛鳥時代の方位に斜交する溝2条が検出された。

(伊賀高弘)

普及啓発事業（平成26年12月～平成27年2月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや小さな展覧会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加等の普及啓発活動を行っています。



第129回埋蔵文化財セミナー

埋蔵文化財セミナー

第129回埋蔵文化財セミナーを、平成27年2月21日（土）に京田辺市立社会福祉センター第1研修室で実施しました。

今回のセミナーでは、『都城と古代交通』をテーマとして、「1.恭仁宮跡の構造を探る－最新の発掘成果から－」、「2.山陽道沿いの遺跡の調査－京田辺市三山木遺跡他の調査から－」、「3.木津川流域の古代遺跡と道－内里八丁遺跡と芝山遺跡」の3本の発表を行いました。

第1題では、恭仁宮の朝堂院の内部で確認されていた大型建物についての新たな知見、および朝堂院南門の存在を窺わせる柱列の検出などの最新成果を素材に、現時点における宮の中核部の構造を読み解きました。第2題では、京田辺市三山木駅周辺の区画整備に伴い実施された埋蔵文化財の調査成果を総覧し、古代の建物や溝などが、官道（古山陽道）の方に揃っているものから、やがて正方位に変遷する傾向に注目し、その背景を考察するとともに、文献にみえる「山本駅」との関連について検討を加えました。第3題は、木津川流域で確認された官道の調査事例を紹介し、歴史地理学で導き出された古道復元が考古学で実証された例として内里八丁遺跡（八幡市）と芝山遺跡



第129回埋蔵文化財セミナーロビー展示



平安京跡・東本願寺前古墓群現地説明会

(城陽市)の道路状遺構の調査を紹介し、官道(駅路)が遺構として把握できることを紹介しました。

あわせて、会場前ロビーにおいて、内里八丁遺跡出土の絞胎陶枕をはじめ周辺域で出土した古代の円面硯・皇朝銭など、テーマに関連する出土品・写真パネルを展示しました。

当日は75名の参加者を得て盛況のうちに無事終了することができました。さらに、セミナー終了後、地元の京田辺市立中央公民館の展示室を案内し、市内の出土品について担当者による列品解説を実施し、好評を博しました。

現地説明会・現地見学会等

平成27年1月10日(土)に平安京跡・東本願寺前古墓群の現地説明会を実施しました。観光都市京都の玄関である京都駅にほど近い地点で、鎌倉～室町時代の食器類が多量に納められた土坑が多数検出され、職人町として栄えた八条院町・七条町の姿を彷彿とさせる成果について公開し、325名の参加を得ました。

平成27年1月25日(日)に京田辺市の松井横穴群について現地説明会を実施しました。八幡市から京田辺市にかけての丘陵部では多くの横穴墓がこれまで調査されていますが、その一画に位置する

松井横穴群の調査で新たに発見された70基の横穴墓の成果について、公開しました。当日は穏やかに晴れた冬日和ということもあって、京田辺市民をはじめ、957名と非常に多くの方が見学に来られました。

1月28日(水)に、城陽市下水主遺跡で地元の方々を対象に現地公開を実施し、22名の参加を得ました。この遺跡でこれまでの調査で数多く確認された島畑について、その実際の姿を見学していただき、往時の耕作地の姿を学んでいただきました。

1月31日(土)には、舞鶴市において大川遺跡調査報告会を実施しました。発掘調査を終え



松井横穴群現地説明会



下水主遺跡現地見学会



大川遺跡調査報告会



乾谷遺跡発掘現場見学会



出雲遺跡・中古墳群現地説明会



平等院旧境内遺跡現地説明会

た大川遺跡の現地公開と、舞鶴市加佐公民館2階ホールを会場に報告会を実施しました。報告会では「むかしむかしの大川～発掘でわかったムラの暮らし」をテーマとして、当調査研究センター職員により、「大川で使われた焼きもの～焼きものいろいろ、これはなに?」「むかしむかしの大川1～卑弥呼から聖徳太子の時代」「むかしむかしの大川2～清盛から幽斎」の報告が行われました。当日は雪深い一日でしたが、地元の方々を中心に103名の参加を得て盛況のうちに終えることができました。

2月18日(水)には、精華町乾谷遺跡で地元の方々を対象に発掘現場見学会が催されました。室町時代と江戸時代の水田について、付近を流れる山田川の洪水のたびに耕作地が整備されてきた様子を説明し、60名の参加者は興味深く参加されました。

2月22日(日)には、亀岡市の出雲遺跡・中古墳群で現地説明会を実施しました。地上には姿を留めていなかった古墳が数基確認され、中でも中1号墳では墳丘斜面に約25mにわたり葺石が残され、壮観な様子を眼前に、64名の参加者は興味深く見学されました。

2月28日(土)には、宇治市の平等院旧境内遺跡で現地説明会を開催しまし

た。調査地点は世界遺産の平等院鳳凰堂にほど近い宇治川河川敷内で、江戸時代に築成されたと考えられる堤状遺構がみつかりました。多数の丸太杭を打ち込み、人頭大の石が埋め込まれた堤状遺構を前にして、210名の方々が興味深く見学されました。(伊賀高弘)

第21回 京都府埋蔵文化財研究会

「京都府内の信仰関係遺跡、遺物の検討」の開催成果とその意義

京都府埋蔵文化財研究会は、府内の埋蔵文化財関係機関を大学ブロック・南山城ブロック・乙訓ブロック・丹波ブロック・丹後ブロック・京都市ブロック・京都府ブロックの7ブロックに分割し構成される研究会組織である。今回で21回目をむかえるが、大学ブロックを含め埋蔵文化財関係機関が一堂に会して実施される研究会は、全国的にみて稀有な研究会である。研究会は、各ブロックが輪番で実行委員会を組織し、企画・運営されている。開催内容は、各ブロックで最も関心の高いテーマが選択され、各ブロックごとの発表により、研究会が成立する。

今までのテーマを概観すると、発掘調査成果を基層に立ち上げられた研究会であることから、調査成果とその問題点をテーマとする内容が最も多いが、各時代に焦点をあてたテーマが選択されたり、首長墓や群集墳、建物遺構、城郭などが選択されたことがある。

今回は、「京都府内の信仰関係遺跡、遺物の検討」と題して、平成27年12月6日(土)に京都府ブロックが実行委員会を構成して龍谷大学大宮学舎で実施した。当日は、100名を超える参加者を数えた。学生の参加も多く、世代間の交流にも一役買っている。

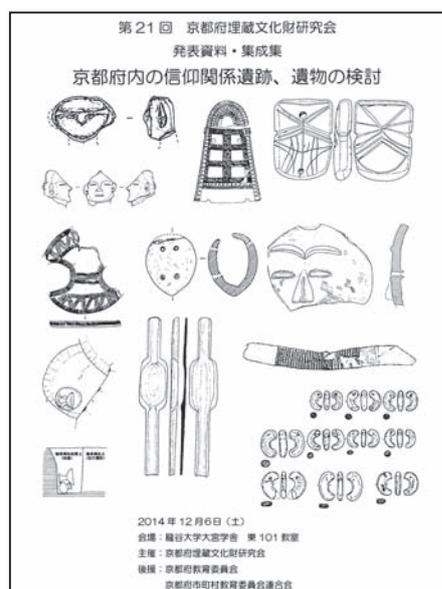
信仰関係遺跡と遺物に焦点をあて、発表者による研究成果報告とともに各ブロックでの関係資料の集成を掲載することができた。その意味で資料的価値は高いといえる。発表および資料集成については、縄文時代から飛鳥時代までを対象としたが、宗教性が極めて高くかつ膨大な資料蓄積が想定される前方後円墳と寺院については、対象外として開催した。

まず、基調報告として京都大学文化財総合センターの千葉豊氏より「考古資料から『信仰』をどのように読み解くか」と題して問題提起をいただいた。考古資料の背景にある宗教的概念

の究明は、可能性を極限まで高められても実証できない難しさを有していることをあらためて共通認識した。それに続いて各ブロックの関連資料の評価をはじめ、縄文土器棺墓やかまど、土器の柱穴埋納などの発表が続いた。特に、大学ブロック代表の京都府立大学考古学研究室での発表は、共同研究を担った学生による発表もあり、徐々に世代交代をむかえる風景を壇上に見ることができた。

この研究会が今後も継続され、関係者が必ず年に一度会し、京都府の歴史を考古学的に検証する会であり続けることを祈念し、開催報告を終わりたい。

最後に、資料集成に尽力された各ブロックの方々にあらためて、御礼を申し上げたい。(小池 寛)



資料集表紙

センターの動向

(平成26年11月～平成27年2月)

月日	事項
11 14	木津川河床遺跡(八幡市)調査着手
15	「関西考古学の日」秋の考古学講座、石井調査課長「縄文丸木舟」(10名参加) 向日市まつり(泥めんこ拓本体験でセンターブース参加、95組体験)～16日
26	長岡京連絡協議会
12 16	平等院旧境内遺跡調査開始
17	長岡京連絡協議会
1 10	平安京跡・東本願寺前古墓群(京都市)現地説明会(325名参加)
16	平安京跡・東本願寺前古墓群(京都市)調査終了
22	久々相遺跡(向日市)調査開始
25	松井横穴群(京田辺市)現地説明会(957名参加)
28	長岡京連絡協議会 下水主遺跡(城陽市)現地見学会(22名参加)
29	木津川河床遺跡(八幡市)調査終了
31	大川遺跡(舞鶴市)調査報告会(103名参加)
2 2	大川遺跡(舞鶴市)調査終了
3	寺町旧域・法成寺跡(その2)(京都市)調査着手
18	乾谷遺跡(精華町)発掘現場見学会(60名参加)
20	京都市立花園小学校就学前子育て講座(保護者45名参加)
21	第129回埋蔵文化財セミナー(京田辺市、75名参加)
22	出雲遺跡・中古墳群(亀岡市)現地説明会(64名参加)
25	長岡京連絡協議会
26	出雲遺跡・中古墳群(亀岡市)調査終了
28	平等院旧境内遺跡(宇治市)現地説明会(210名参加)

編集後記

「東風吹かば にほひおこせよ梅の花 主なしとて 春な忘れそ」(菅原道真)

実に 61 年ぶりの大雪に見舞われた京都ですが、北野天満宮の梅の開花をうけて、少しずつ春の気配を感じさせる時節を迎えています。

今年度の第 3 冊目となる『京都府埋蔵文化財情報』第 126 号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、府内一円で実施した発掘調査・普及啓発事業の成果報告をいち早くお伝えするとともに、平成 26 年度に終了した当調査研究センター職員による共同研究事業の研究報告、さらに、事務局を務めた「京都府埋蔵文化財研究会」開催の成果などを掲載いたしました。

ご一読いただければ幸いです。

(編集担当 伊賀)

京都府埋蔵文化財情報 第126号

平成 27 年 3 月 31 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604 - 0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER